

## 梵文『維摩経』のレトリックと偈頌

文学研究科インド哲学仏教学専攻博士後期課程 3 年

4120170001 梅田愛子

本論文は、レトリックと偈頌という、今まであまり研究されてこなかった切り口から梵文『維摩経』(Vimalakīrtinīrdeśa, 以下 Vkn) を分析するものである。学会の通説として『維摩経』は戯曲的であり、冗長になりがちな空思想に奥行きを与えつつ、物語を進めることに成功していると評されてきた。しかし、実際どのような表現や構造的特徴を持っていることがそのような評価に繋がっているのか、これの妥当性や根拠を詳細に論じた研究は今までに無い。

また、長い間、梵文写本の存在自体は確定されていたものの、それまで失われていた『維摩経』の梵文完本の写本が発見されたことは、この初期大乘経典の解明に大きな意義を持っている。しかし、その校訂テキスト『梵文維摩経—ポタラ宮所蔵写本に基づく校訂—』(2004 年, 大正大学出版会, 以下, 大正校訂版) は基本的に古典サンスクリット (Skt.) に改訂されており, saṃdhi の自由度の高さや語末の m の多用, 古典 Skt. の正書法にはない流音の後の子音連続など, もとの中期インド・アリア語 (MIA) 的な写本の言語的特色や個性が消されてしまっている。植木雅俊氏も『梵漢対照・現代語訳維摩経』(2011 年, 岩波書店) を上梓されたが, 厳密とは言い難い校訂で問題も多い。このように, 『維摩経』唯一の梵文写本の校訂研究には, まだまだ議論と改訂の余地がある。

そこで本論文では, Vkn を構造的特徴と言語的特徴とに大別し, 前者では Vkn のパラドキシカルな表現と yamakapūṭa 構造との関連について解明した。また, 古代インドの演劇論を参照しつつ, Vkn の戯曲的特色も明らかにした。後者に関しては, 偈頌に古い語形が残されやすいことから, Vkn 第 1 章の 15 偈・第 7 章の 42 偈の韻律分析とテキスト解析を行った。本論文の構成は以下の通りである。

凡例  
略号一覧  
参考文献一覧

序：『維摩経』の概観  
0.1 『維摩経』の成立とその背景  
0.2 『維摩経』の構成と概要

本論  
第 1 章 本論文の目的と方法  
1.1 本論文の目的  
1.2 研究方法

## 第2章 Vkn の構造的特徴

### 2.1 パラドックスと yamakapūṭa

#### 2.1.1 yamaka の概観

#### 2.1.2 advaya (不二) と advayapraveśa (入不二) —その機能と特色

##### 2.1.2.1 advaya の概観

##### 2.1.2.2 「入不二法門品」の教説(言葉としての yamakapūṭa)

##### 2.1.2.3 小結

#### 2.1.3 様々な二面性(設定としての yamakapūṭa)

##### 2.1.3.1 主人公・ヴィマラキールティの二面性

##### 2.1.3.2 釈尊の仏国土の二面性, そのサハー世界と他世界の対比

##### 2.1.3.3 ヴィマラキールティを中心とした物語とシャーリプトラを中心とした物語の対比

##### 2.1.3.4 小結

#### 2.1.4 交錯配列的構成(構成としての yamakapūṭa)

##### 2.1.4.1 場面の交錯配列的構成

##### 2.1.4.2 教説の交錯配列的構成

##### 2.1.4.2 小結

### 2.2 Vkn の戯曲的構成と特色

#### 2.2.1 はじめに

#### 2.2.2 ラサ (rasa) の理論と Vkn

#### 2.2.3 連結 (saṃdhi) の理論と Vkn

#### 2.2.4 小結

### 2.3 まとめ

## 第3章 Vkn の言語的特徴 —偈頌を通して—

### 3.1 はじめに

### 3.2 韻律分析, テキストの校訂とその和訳

#### 3.2.1 第1章, 第1~15偈

#### 3.2.2 小結

#### 3.2.3 第7章, 第1~42偈

#### 3.2.4 小結

### 3.3 まとめ

## 結論

付録A: 第1章&第7章, 梵蔵漢対照テキスト, 梵文和訳

付録B: 『維摩経』に関する先行研究一覧

## 謝辞

まず本論第2章で, 構造的特徴について, (A)言葉としての yamakapūṭa, (B)設定としての yamakapūṭa, (C)構成としての yamakapūṭa が, まるで<入れ子構造>のように組み込まれ, 繋がりをもって機能していることで, Vkn のパラドックスに奥行きとその魅力を与えていることを解明した。

(A)に関して, 『維摩経』の代表的な教説の一つである advaya (不二) について, “Advayadharmamukhapraveśaparivarta (入不二法門品)”を中心に, その構造を分析した。Vkn において, advaya とは反射的に dvaya を連想させ, それは一つの yamaka でもある。Advaya とは言葉による yamaka 表現である。そのような yamaka 表現を重ねて説かれるのが「入不二法門品」の教説である。それは以下のような三段階構造になっている。

- ① A と B (などに代表される識別作用) を dvaya として規定する。

- ② その dvaya が否定 (advaya) される。
- ③ ②の実践 = advayapraveśa である。

例えば、般若波羅蜜を宣揚する般若経の「A=non-A」という表現は、既成概念の破壊であり、世俗の言語習慣の否定であったが、ある種、非常識とも言える表現の繰り返しによって難解であった空性思想を、『維摩経』の「入不二法門品」では大乘仏教の教えに特定のテーマに沿って段階を踏んで説き、最終的にその実践までを促す。その手段として、元々、教理の暗唱や整理の方法として使用されていた、仏教徒にとって馴染みのある yamaka を応用し、この教説に大乘版のアビダルマとも言える機能を持たせた。そして、従来のように単に「A と B は advaya である」という平面的な表現ではなく、yamaka を言語表現や構造にまで多重に組み込むこと (yamakapūṭa) により、advaya という教説に体系的な奥行きを与えた。

(B)に関して、『維摩経』には様々な相対する二面性 (yamaka) —すなわち、主人公であるヴィマラキールティの二面性・釈尊の仏国土の二面性・そのサハー (娑婆) 世界と他世界の対比・ヴィマラキールティを中心とした物語とシャーリプトラを中心とした物語の対比など— が現れるが、これら物語の設定に着目し、そのどれもが衆生利益や衆生の教化・成熟といった実践的な目的 (すなわち菩薩行) と結び付いていることを明らかにした。また、『維摩経』での<双神変 yamaka-prātihārya>が衆生 (特に声聞・阿羅漢) の教化に結び付いているという、これまで指摘されてこなかった点も解明した。

(C)に関して、経全体の空間的な舞台や教説も、実は交錯配列的に配置されていることを分析した。交錯配列法とはキアスムスとも呼ばれ、逆転したパラレリズムの一種である。すなわち、文章を文学的な単位に分解し、その単位を進行方向に並べると (A-B-C-...) と進み、単位の中心 (X) に到達した後、元の出発点に戻ってテーマが逆に繰り返される (...-C'-B'-A') というものである。これも一種の対称の重なりであり、また yamaka のシンボリックな形である。これを調査したところ、全て円滑に対照にはならなかったが、見過ごすには人為的な数のキアスムスが多く見られ、交差軸 X では「智慧・弁才 (方便)・慈悲」という仏教らしい題材が説かれていた。

以上のように、advaya といった教説や<双神変>の示現だけでなく、経中の様々な設定や物語の中で起こる出来事の連続に、まるで<入れ子構造>のように様々な yamaka が組み込まれ、繋がりをもって表現されていることが『維摩経』のパラドックスの構造的特徴であり魅力である。

さらに、Vkn の戯曲的特色について、現存最古であり、紀元前後の数世紀の間に編纂されたという、バラタ仙 (Bharata Muni) 作『演劇典範』 (*Nāṭyaśāstra*, 以下 NS) というインド古典演劇百科全書における記述を参照しつつ、インド美学の根幹を為すラサ (rasa) や戯曲の骨組みとなる連結 (saṃdhi) の理論を中心に考察した。8つのラサについては、以下のセットになる4項目から検討した。

- |                      |                   |
|----------------------|-------------------|
| (ア) 1. mokṣa (解脱)    | 2. hāsyā (諧謔)     |
| (イ) 3. raudra (忿怒)   | 4. karuṇā (悲愴)    |
| (ウ) 5. vīra (勇猛)     | 6. adbhuta (驚異)   |
| (エ) 7. bībhatsa (嫌悪) | 8. bhayānaka (恐怖) |

これらを Vkn と照らし合みると、(ア) について、仏教文献であるので解脱がメインのラサとなる。そして、シャーリプトラの疑問や心配（例えば、第5章で座席の心配をするシャーリプトラにヴィマラキールティが法を求めにきたのか、椅子を求めにきたのか突っ込まれる場面）はユーモアをもって描かれている。このように、物語の中でシャーリプトラは道化役的な扱いをうけることが多いが、これも戯曲的特徴の一つである。(イ) については、マハーカーシュヤバの述懐や嘆きは悲痛さと憤りを感じさせる。(ウ) について、主人公・ヴィマラキールティの活躍は勇猛さに溢れているし、多くの驚異的な神変が為される。(エ) についても、サルヴァガンダスガンダ世界の菩薩たちがサハー世界の衆生に嫌悪してはいけないとガンドーッタマクータ如来によって忠告されたり、ヴィマラキールティの神変によってサハー世界にアビラティ世界が持ってこられた時、会座に居た多くの神通力を持つ者たちが恐れ慄く様子が描かれたりしている。このように、Vkn は多くのラサを満たしていることが分かった。

また、連結の理論に関しても、以下のようなプロット・モデルに適合していることが分かった。

- I. 発端 (mukha, opening) : 第2章で善巧方便としてヴィマラキールティが病気であること(衆生成熟のための種)が明示される。ヴィマラキールティによって、衆生の身体を厭離し如来の身体を求めるべきことが説かれる。(メインとなる mokṣa のラサ)
- II. 進展 (pratimukha, progression) : 第3章では聴衆と菩薩が病人の見舞いを断る。(種の成長 [展開] の中断)しかし、第4章でマンジュシュリーがヴィマラキールティの病気見舞いを承諾し見舞いに赴く。(種の成長 [展開] の再開)
- III. 発展 (garbha, development) : 第5章での獅子座の出現と不可思議解脱、第6章における女性神格 (devatā, 天女) とシャーリプトラのやりとり、第7章での如来の家系、第8章における32人の菩薩による「入不二」についての発言とマンジュシュリーの総括、そして維摩の黙でのクライマックス。(種の発芽=様々な教説、その探求)
- IV. 熟慮 (vimarśa, pause) : 第9章におけるサルヴァガンダスガンダ世界から化身菩薩によってもたらされた食事と異世界エピソード、第10章におけるサルヴァガンダスガンダ世界の菩薩たちの来訪と彼らに対する法のみやげ(別の角度からの思索)

- V. 完結 (nirvahaṇa, conclusion) : 第 11 章にて, 再び如来の身体について説かれる.  
(mokṣa のラサ) ヴィマラキールティによるアビラティ世界の示現という神変が起こる. サハー世界の成熟すべき衆生をすべて成熟させてアビラティ世界を元に戻す.  
(衆生成熟という果を得る)

このような「起・承・転・(止)・結」から成るプロットを持っていることも Vkn に戯曲的な印象を与え, また物語を展開する一連のエピソードは, 次に何が起こるのかと読者に緊張感をもたらす.

さらに, 先行研究では『維摩経』の幕場を以下のように三つに分けているが, インドの演劇では五幕以上十幕以内と規定されているので, これは正しくない.

- (1) ヴァイシャーリーのアームラパーリー園におけるブッダの会座 (第 1~4 章)
- (2) 同じくヴァイシャーリーにある維摩の自宅 (第 5~10 章)
- (3) 再びアームラパーリー園におけるブッダの会座 (第 11~14 章)

正しくは以下のように, プロローグとエピローグを含んだ全八幕となる. (ちなみに, プロローグとエピローグは本筋の物語の外にあるものと見做される.)

プロローグ: ヴァイシャーリーのアームラパーリー園

- (1) ヴィマラキールティの住居
- (2) ヴァイシャーリーのアームラパーリー園
- (3) ヴィマラキールティの住居
- (4) サルヴァガンダスガンダ世界
- (5) ヴィマラキールティの住居
- (6) ヴァイシャーリーのアームラパーリー園

エピローグ: ヴァイシャーリーのアームラパーリー園

次に, 本論第 3 章では, 言語的特徴として, Vkn における偈頌の韻律分析やテキスト解析を行った. これについて, 本格的な先行研究は殆どないのが現状である. まず, Vkn 第 1 章の偈について, 前半の第 1 偈から第 8 偈までは 14 音節からなる Vasantatilakā (Vasant.) であるというのは先行研究でも言及される通りだが, Vkn のそれは長音節の resolution が多く見られ, また韻律に合わせるための語尾の省略または不正規な語形の多用など, 自由度が高く, 正規の Skt. で固定された Vasant. とは違うことが分かった. 残りの第 9 偈から第 15 偈までは, パーリ語経典やその註釈 (アッタカター) 文献に見られる 11 音節と 12 音節 (Triṣṭbh/Jagati) の混合詩節に近いものだった. すなわち, Opening は第 1 音節には自由度があり (i, -, または, u), 2~4 音節は「-u-」の弱強格のリズムに固定されている (x

-u-). Cadence の「-u-u」ないし「-u-u-u」は規則的である。Break に「u-u-」が出ないのは特徴的で、大部分「-u-u」であり、「u-u-u」も多い。また、Prākrit (Prā.) から正規の Skt. 化された形跡も随所に見られた。

Vkn 第 7 章の偈については Śloka で書かれており、基本的には正規形である pathyā であるが、所々に非正規形の一つである ma-vipulā が見られた。これも正規の Skt. の固定された ma-vipulā とは違い、特に a/c pd. 前半は「x-u-」に定まっておらず、自由度が高く、パーリ語経典やアッタカター文献に見られる ma-vipulā と酷似している。全体的に resolution も多く見られ、また鼻音を ṃ で代用したり、逆に次にくる音と閉鎖位置を同じくする鼻音に変化したりと、より口語的で MIA 的な箇所が多く散見された。正書法上の規範にルーズな面も見られ、かつ同時に、Prā. から正規 Skt. 化された形跡も随所に見られた。

また、両章の偈頌を通して、「母音+r」の後の子音の綴りが二重になったり、鼻音の後の口蓋音 (palatal) の [ch-] が [cch-] になったり、綴字上の個性が認められた。さらに、語頭の二重子音は単子音であった可能性が高い。もともと MIA 段階の言語で作られていた詩を基に Buddhist Hybrid Sanskrit 化した偈頌であることは間違いない。

これらの偈頌は、他の大乘経典によく見られるような散文の概要を韻文で繰り返し詠うものではなく、物語の中で登場人物の台詞として登場する。Vkn 第 1 章の偈頌は、釈尊のもとを 500 人の同胞と共に訪れたリッチャヴィの少年菩薩・ラトナーカラが、釈尊の起こした大宝傘蓋の神変を見て、仏を讃えるために詠った讃仏偈である。Vkn 第 7 章での偈頌は、章の最後を飾っており、ヴィマラキールティがサルヴァルーパサムダルシャナ菩薩にヴィマラキールティ自身の家族や眷属などがどこにいるか問われ、ヴィマラキールティの回答として詠われるものだが、実際の回答内容は、ヴィマラキールティ個人のことではなく、家族や眷属に見立てた菩薩の資具についてであったり、菩薩行についてであったりする。

讃仏偈自体は仏典に珍しくないが、戯曲的特徴から鑑みても、序幕で舞台の成功を祈り神々に讃歌を捧げることが習慣なので、Vkn 第 1 章で讃仏偈があることはこの点から鑑みても興味深い。Vkn 第 7 章の偈頌については、NS からその位置付けや意義を見出すことは出来ないが、大乘アビダルマ的側面も持ち合わせる本経が真摯な修行者たちのために、大乘菩薩としての心得を暗唱しやすい偈の形にまとめたものであろう。また、この箇所は、不可思議解脱に住する菩薩たちの境界についての教説とキアスムスを成す部分なので、Vkn の副題でもある「不可思議解脱」門へと繋がる実践論としても重要である。

以上、今まであまり注目されてこなかった Vkn のレトリックや偈頌に光を当てることによって、Vkn のパラドックスの構造や戯曲的特色、また言語的特徴を明らかにした。そのことによって、『維摩経』を研究する上での新しい視座を提供できたと思う。この研究を踏まえた上で、これまでの思想研究を捉え直し、より複合的で総合的な『維摩経』の構造の解明が行われることを期待する。また、さらに徹底した『維摩経』の言語的特色とその歴史的立場を解明することが今後の大乘仏教研究に大いに意義があると考えられる。